

「日の暈」

太陽光（時には月光、稀に惑星や恒星、自動車のヘッドランプ）と大気中の水（固体・液体）が作るさまざまな気象現象を「大気光学現象」といいます。虹が一番有名なので、目にする機会も一番多いと思われていますが、統計的には虹は比較的稀な現象です。実は、出現回数でいうと「暈（うん、またはかさ）」のほうがずっと多いのです。

「暈」は、太陽や月の手前（に決まっていますが）が上層雲に覆われている時に、太陽や月の周囲に光の環が現れる現象です。太陽の場合を「日の暈（ひのかさ）」または「日暈（にちうん）」、月の場合を「月の暈（つきのかさ）」または「月暈（げつうん）」と呼びます。雲は巻層雲（うす雲）の場合が一番出現の確率が高いですが、幕状巻雲や、時には尾曳巻雲（おびきけんうん）や巻積雲（うろこ雲）でも日暈がかかることがあります。「内暈（ないうん）」（天体中心からの視角度＝ 22° ）と「外暈（がいうん）」（視角度＝ 46° ）の2種類がありますが、出現するのはほぼ100%「内暈」です。（ごく稀に、 9° ・ 18° ・ 20° ・ 24° ・ 35° などの暈も現れます。これは氷晶の結晶の形——例えば角柱か角錐か——のちがいによるものです。）

「暈」は上層雲の氷晶がプリズムの役割をして、太陽光が屈折させることで起きます。屈折角度は波長によってちがうので、わずかに虹のように色がついて見えます。しかしそれは非常に淡い色なので、見た目はほとんど白く見えることが多いです。



「梅雨の晴れ間に現れた日暈」 日暈の写真を撮る時は、普通は地上物（たとえば鉄塔）で太陽（光球）を遮蔽するのですが、この時は手前に雲（積雲）があったので、見た目に近く撮れました。



「日暈の光環の拡大写真」 内側が赤、外側が青とわかります。黄色や緑も見えます。虹とちがって、紫はほとんど視認できないのが特徴です。（理由の説明はすごく面倒なので省略。）

【子どものノートから】（3年生）

「たいようにワッカがついていました。ワッカにはすこし色がついていてきれいでした。」

「太ようのまわりに、丸くてきれいなにじが見えました。てい学年おく上で見たら、太ようにちかいので、もっと大きく見えました。」

「このたいよもの、わわ（この太陽の環は）、にちうんというなまえだと、先生が、おしえてくれました。にちうんは、たいように、うすいくもが、手まえにあると、できます。きれいなものなので、あしたも見たいです。」

どれも、すばらしい観察記録です。大気光学現象の勝利ですね。

（お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋）